

Saga  
Mobile  
Academy of  
ART

SMAART 佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート 2017 記録集

佐賀大学芸術地域デザイン学部



**SMAART**  
2017 記録集

## 目次

ごあいさつ	3
佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アートに寄せて 森司	4
SMAART スタートアップ入門編について	5
SMAART 事業イメージ	6
2017年度 スケジュール	8
2017年度 SMAART講座編	9
佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート 開講式	12
佐賀県の茶文化を知る	16
アートカフェについて知る・考える	20
佐賀県の文化芸術情報を伝える	22
佐賀県の伝統菓子文化を知る	24
文化芸術とお金の仕組み	28
他県の取り組みを知る	30
オフミーティング	34
アートカフェ アイデア発表会	36
アートカフェ 実践編 街歩き写真ワークショップ	42
受講生の声	46
SMAARTプロジェクトメンバーエッセイ編	47
芸術で地域を拓き、芸術で世界を拓く 小坂智子	48
まちづくりの中の「アートカフェ」 西島博樹	49
偶然の出会いがあふれるまちへ 杉本達應	50
カフェと芸術と大学と 花田伸一	51
事務局雑感	52
資料編	53
講師プロフィール	54
用語解説	56
広報資料	58
メディア掲載	59

## ごあいさつ

「佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート」[Saga Mobile Academy of Art 略称:SMAART]は、佐賀および周辺地域のアートマネジメント人材の育成を目指すプロジェクトで、「平成29年度 文化庁 大学を活用した文化芸術推進事業」として取り組まれるものです。

本プロジェクトでは地域の方々を対象に2017年度から3年間にわたってセミナーと実践的な活動を展開するとともに、地域の文化芸術に関する情報や人材が集まるネットワークづくりを目指しています。

2017年度には「スタートアップ入門編」、2018年度には「ブラッシュアップ応用編」として、佐賀県内のやきもの・食・観光・歴史に関する地域資源を再発見するセミナーやアートマネジメントの基本を学ぶセミナーを開講します。また県内の文化芸術情報を発信するWEBサイト構築に取り組みつつ、実験的にアートカフェやアーティスト・イン・レジデンスの企画体験をしながら、アートを通じて人々が交流する「アートカフェ」実現に向け、その可能性を受講生の方々と模索していきます。

2019度は「プラクティス実践編」として、前年度までの成果をふまえて、招聘アーティスト・受講生・地域住民とともに、江戸期に「茶」を通じて人々に禅の教えを説いた佐賀県ゆかりの禅僧「売茶翁」にちなんだアートプロジェクトに取り組みます。

本冊子はSMAARTの2017年度の活動についての記録です。「芸術で地域を拓き、芸術で世界を拓く」をモットーに佐賀大学が2016年度に開設した芸術地域デザイン学部によって企画運営される本プロジェクト、その「スタートアップ」の記録をどうぞご覧ください。

2018年3月

佐賀大学芸術地域デザイン学部

## 佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アートに寄せて

「石の上にも三年」とは、良く言ったもので、習い事には一定の時間を必要とする。アートマネジメントの習得にもそれは言えることで、概念の習得や実践的経験を積むためには少なからず時間を要するものだ。企画、実施、検証と1年の時間を要するものを準備なく展開することはもとより無理なことで、企画のための準備時間も必要となる。

文化庁が推進する「大学を活用した文化芸術推進事業」となる「佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート」(通称SMAART)は、スタートアップ、ブラッシュアップ、プラクティスの3ステップ3年間のコース設計がなされている。具体的には、「茶、陶磁器、菓子」といった地域資源を知る1年目を経て、売茶翁プロジェクトを展開する。伝統や歴史を継承しつつ、未だ見ぬ新しさを内包する活動を生み出すための、時間が確保されている。

そのプロセスは参加者間に仲間意識や地域とのネットワークを形成させていくことだろう。人材育成講座としてゴールの設定はされているものの、その現場のクリエイションにコミットする自由は参加者に委ねられるとすれば、自発的で意欲的な学びの場が形成されることだろう。

さらに大学は学内に多彩(多種多様)な専門家を知的人材として持つ。SMAARTは、佐賀大学の芸術地域デザイン学部の主宰講座として、芸術を通じた地域創生人材の育成事業として佐賀の地域資源を活かした実践を目論むわけだが、単に事業を展開する以上に、評価・検証の設計やアカデミックな考察が加味され指針の提示もされることだろう。このことによってパイロット事業が持続可能なものとして継続事業となり、汎用性のある人材と事業育成プログラムとして結実する期待も高い。

それゆえに受講生も学びを超えたチャレンジをする覚悟を求められることだろう。それは失敗を恐れず失敗に学ぶ実験する姿勢だ。先達の手法をなぞるのではなく、乗り越えていくイノベーター的な姿勢だろう。実験が許されるまたとない場において、どんな売茶翁が誕生することになるのだろう。地域資源豊かな地に新しいプロジェクトが始動する楽しみはつきない。

森 司

(アーツカウンシル東京 事業推進室 事業調整課長)

## SMAART スタートアップ入門編について

SMAART初年度の2017年度には、佐賀県内の地域資源について学ぶAコース「旅するセミナー」、アートマネジメントについて学ぶBコース「アートマネジメント・セミナー」、両コースの受講生間の交流と地域の文化芸術情報発信に取り組む「ネットワーキング」の三本柱を並行して講座、見学ツアー、ワークショップ等に取り組んだ。

Aコース「旅するセミナー」では、佐賀県内の地域資源として有田エリアの陶磁器、嬉野エリアの茶文化、小城エリアの和菓子について、それぞれ専門家や関係者を招いてのレクチャーおよび現地見学を行った。

Bコース「アートマネジメント・セミナー」では、国内アートプロジェクトの事例紹介、アートスペース運営に関するレクチャーとワークショップ、企業メセナに関するレクチャーや助成金獲得に向けてのワークショップ等を行った。

「ネットワーキング」では地域の文化芸術情報を発信するためのサイト作りに向けてのワークショップを行った。

年度の締めくくりとして、受講生によるアートカフェのアイデア発表会と、現実のアートイベント運営を体験するべく、プロのアーティストを講師に招き、街歩き写真ワークショップに取り組んだ。

## 芸術を通じた地域創生人材の育成

肥前窯業圏のやきものと茶文化をめぐるアートカフェとネットワークづくり

### コンセプト

- 1 新設の芸術地域デザイン学部の専門性を活かし、肥前窯業圏の地域文化を新たな視点で発見・発掘しながら、芸術を通じた地域創生人材を育成する。
- 2 茶、スイーツ、陶磁器などの地域文化とアーティスト・イン・レジデンスを組み合わせた「旅するアートカフェ」を企画・実践する。
- 3 地域の人材交流と情報発信を促進するために、参加者のネットワーキングと、文化芸術情報発信のオンラインプラットフォームの構築と運営をおこなう。

## 実施場所

佐賀大学 本庄キャンパス・有田キャンパス  
 佐賀県 佐賀市／小城市／嬉野市／有田町  
 長崎県 長崎市

## 事業実施体制

### 企画・運営

事務局[佐賀大学芸術地域デザイン学部]  
 教員<キュレーション・デザイン・経営学など>  
 事務局スタッフ<企画運営・事務>

### 2017年度 事業アドバイザー

森 司<アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長>  
 若林 朋子<プロジェクト・コーディネーター / 立教大学 大学院21世紀社会デザイン研究科 特任准教授>  
 Nadegata Instant Party  
 (中崎透+山城大督+野田智子)<美術ユニット>  
 倉成 英俊<株式会社社電通電通総研Bチーム>

### 協力

佐賀県  
 佐賀県立窯業技術センター  
 佐賀県立九州陶磁文化館  
 佐賀県立美術館  
 公益財団法人 佐賀市文化振興財団  
 佐賀大学肥前セラミック研究所  
 佐賀大学茶の文化と科学研究所  
 佐賀大学美術館  
 文化経済学会<日本>九州部会

### 後援

サガテレビ  
 佐賀新聞社

## 1. スタートアップ

平成29年度

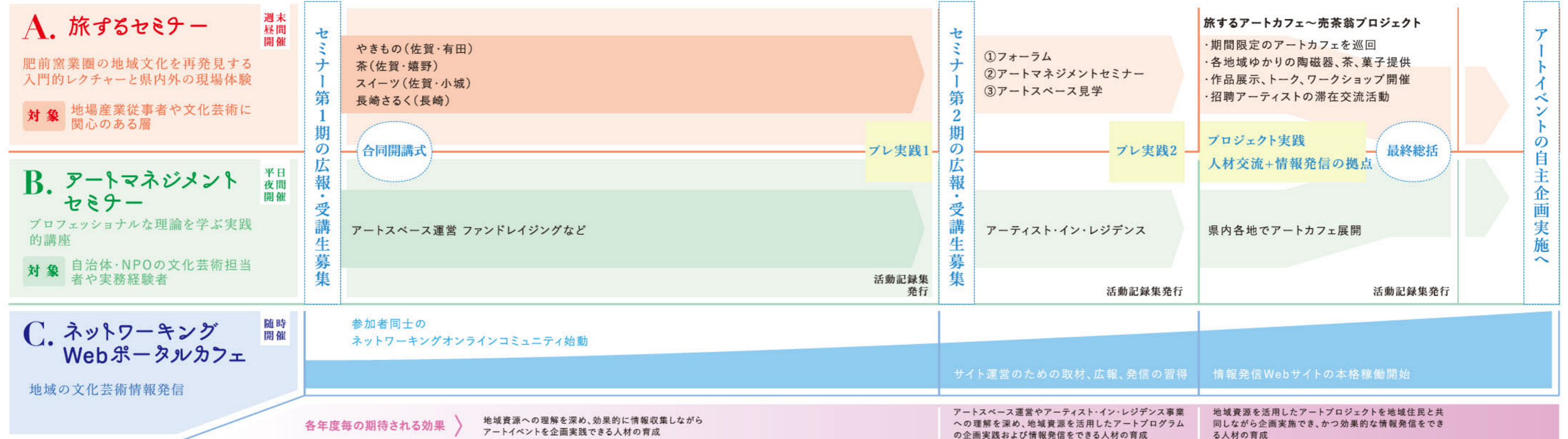
## 2. ブラッシュアップ

30年度

## 3. プラクティス

31年度

アフターステージ  
 自立的活動へ  
 32年度以降



# 2017年度 スケジュール

2017年度

## SMAART 講座編

### Aコース 旅する セミナー

### Bコース アート マネジメント セミナー

6/25 | 日曜日 | 10:00-17:00 | 佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート 開講式

8/6 | 日曜日 | 10:00~17:00 | 佐賀県の茶文化を知る

8/18 | 金曜日 | 19:00~21:00 | アートカフェについて  
知る・考える

9/23 | 土曜日・祝日 | 10:30-17:30 | 佐賀県の文化芸術情報を伝える

10/15 | 日曜日 | 10:00~17:00 | 佐賀県の  
伝統菓子文化を知る

10/20 | 金曜日 | 19:00~21:00 | 文化芸術とお金の仕組み

11/4 | 土曜日 | 10:00~17:00 | 他県の取り組みを知る

12/9 | 土曜日 | 14:00-17:00 | アートカフェ アイディア発表会

1/20 | 土曜日 | 10:00-17:30 | 一日アートカフェ 実践編  
『街歩き写真ワークショップ』



山田屋

久



出入口

「佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート 開講式」  
 2017年6月25日(日)  
 10:00~17:00

会場：佐賀大学有田キャンパス  
 見学先：佐賀県立九州陶磁文化館  
 幸楽窯(徳永陶磁器株式会社)  
 有田陶磁の里プラザ(有田焼卸団地)  
 講師：  
 森 司「アートプロジェクトをはじめよう」  
 花田伸一「地域とアートプロジェクト」  
 若林朋子「自治体の文化芸術事業あれこれ」  
 Nadegata Instant Party(中崎透+山城大督+野田智子)

受講者数：29名



Aコース  
 旅する  
 セミナー

Bコース  
 アート  
 マネジメント  
 セミナー

佐賀大学 有田キャンパス



森司氏



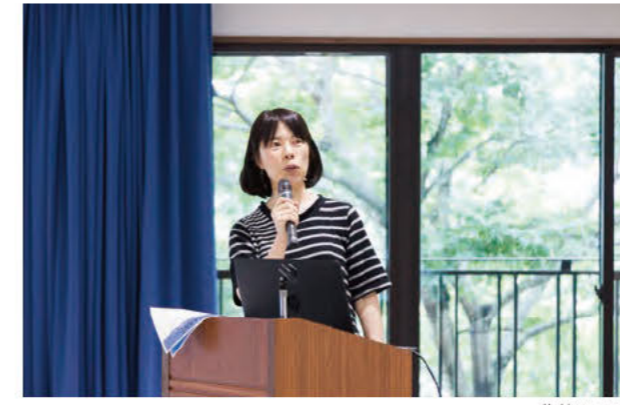
花田伸一

6月25日の開講式よりSMAARTは始まった。2017年4月に開設されたばかりの佐賀大学有田キャンパスに、AコースとBコースの受講生29名が集結した。佐賀の歴史文化や地域資源を学び、アートプロジェクトへの活用可能性を考えるSMAARTのスタートに、400年前に日本で初めて磁器が製作された地であり、現在も肥前陶磁の中心である有田が選ばれた。

10時から17時までの日程で、午前中は講義、午後は、有田の窯元等の見学が行われた。挨拶、全体計画の説明、事務局スタッフの紹介の後、講義が開始された。

講義は、アーツカウンシル東京の森司氏による「アートプロジェクトをはじめよう」からスタートした。企画には必然性が必要であるということから始まった講義には、短時間にもかかわらず、アートプロジェクトに関する基本が濃密に詰め込まれていた。企画を共有し説明するための「ことば」の重要性の指摘は、事務局メンバーにとっても示唆的であった。

事務局の花田による「地域とアートプロジェクト」では、これまでキュレーションしたアートプロジェクトが紹介され、地域とつながるといふこと具体例が示された。



若林朋子氏



Nadegata Instant Party  
 (左から野田氏、山城氏、中崎氏)

種々のアートプロジェクトのコーディネートに携わり、また立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科にて文化政策を教える若林朋子氏は、「自治体の文化芸術事業のあれこれ」と題して講義。改正されたばかりの文化芸術基本法の変更点から、自治体、地域で文化・芸術をとらえる際に必要な視点が説明され、文化・芸術を取り巻く状況として、文化・芸術と社会との関わる領域が拡大されていることが指摘された。

ゲストアーティストのNadegata Instant Party(中崎透氏、山城大督氏、野田智子氏)からは、全国各地で行ってきたアートプロジェクトが紹介され、ユーモアあふれる3人の会話形式のトークから、発想、意図、経緯や役割分担などの企画の具体例を学ぶことができた。





佐賀県立九州陶磁器文化館



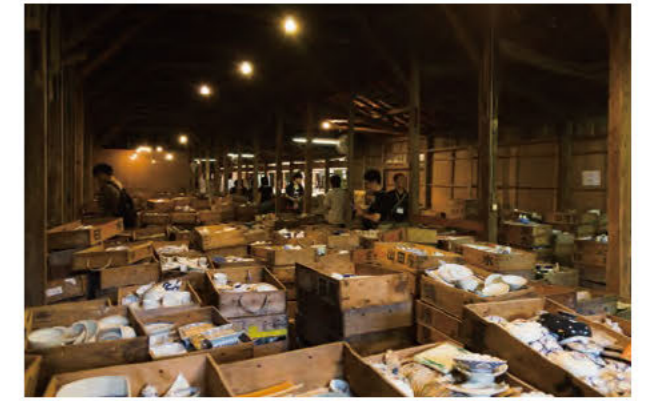
午後の見学は、佐賀県立九州陶磁文化館、幸楽窯、有田焼卸団地の3か所が選ばれた。有田焼の歴史を学び、優れた作品を鑑賞した後で、実際に制作・製造されている現場を見学し、製品が、ひとつひとつと手渡される場を見るという流れである。

佐賀県立九州陶磁文化館では、九州各地の陶磁器や、肥前窯業圏で活躍する現代陶芸作家の作品、そして柴田コレクションなどを、学芸員の解説とともに見学。やきもの奥深さとともに、肥前窯業圏の豊かさを再認識することとなった。



幸楽窯

ついで、有田焼の窯元の見学として幸楽窯(徳永陶磁器株式会社)を訪れた。幸楽窯では、ブラジル人のビメンタ氏の案内のもと、陶磁器制作の実際について説明を受けながら、工場を見学。幸楽窯は、これまでに、アートプロジェクトの実施の実績もあり、アーティスト・イン・レジデンスとして海外からの滞在者を受け入れ、幅広く活動している。



有田陶磁の里プラザ・有田焼卸団地では、受講生は自由に各店舗を回った。伝統的な手法の器から、有田焼創業400年を機に、海外のデザイナーとのコラボレーションから生まれた「2016/」などの新しい形まで、多様な有田焼を見ることができる。

見学後は再度、有田キャンパスに集合し、講師からのまとめのコメントを受けて、開講式は終了した。終了後には講師に質問したり、受講生間で相互に交流したりする姿が見られ、新しいコミュニティのスタートを予感させた。(小坂)



### 受講生の声

ARTやプロジェクトに関しての言葉を学び身につけるといふことの大切さをつくづく納得しました。なので、見学の際はそれを意識しました。

アートマネジメントを学べる場はなかなかないと思うので、講座を受講する中で少しでも身につけていきたい。ここで出会えた方たちの縁を大事にしていきたいと思う。







「佐賀県の茶文化を知る」  
 2017年8月6日(日)  
 10:00~17:00  
 会場：肥前通仙亭  
 見学先：佐賀県茶業試験場・大茶樹・お茶ちゃ村  
 講師：  
 川本喜美子『売茶翁ってどんな人?』  
 石丸幹二『佐賀の茶文化』  
 受講者数：22名

Aコース  
 旅する  
 セミナー

肥前通仙亭



川本喜美子氏



石丸幹二氏

有田エリアにおいて陶磁器について学んだ初回に続き、佐賀の地域資源を見学するAコース2度目の回として、佐賀の「茶」文化をテーマにセミナーおよび関連場所の見学を行った。佐賀では嬉野茶をはじめとする茶葉の生産地が各地にあり、また「煎茶の祖」とされる江戸期の禅僧、売茶翁を輩出するなど、茶文化をめぐる地域資源が数多く見られる。

午前中に佐賀市の肥前通仙亭にてセミナーが行われた。同施設は地場産品交流会館として2010年に開館した佐賀市立の文化施設である。日常的に煎茶体験や茶臼抹茶引き体験を提供するほか、茶会や文化連続講座を定期的で開催するなど、物産交流のみならず文化情報発信および人材交流の場となっている。

セミナーでは佐賀大学農学部石丸幹二氏から佐賀における茶について歴史的な背景や茶葉の特徴、現代の生産状況などの概論的な内容が話された。続いて肥前通仙亭の指定管理者として運営に当たっているNPO法人高遊外壳茶翁顕彰会の理事長である川本喜美子氏から、佐賀ゆかりの禅僧で「煎茶の祖」売茶翁についての紹介ならびに同NPOの活動についての報告がなされた後、受講生全員に嬉野茶による煎茶体験が提供された。





佐賀県茶業試験場



午後よりバスにて佐賀の主な茶どころである嬉野エリアへ移動。まず佐賀県茶業試験場を訪れ、茶畑での種々の茶葉の栽培の様子、工場内の製茶機械・分析機器などを見学した。続いて国の天然記念物に指定されている「大茶樹」を見学。樹高は4.6メートルに及ぶ。嬉野の山林を開拓し茶樹栽培の礎を築いたという吉村新兵衛が慶安年間(1648~1652年)に植えたと言われている。最後に「お茶ちゃ村」を見学。同所には、江戸末期に嬉野茶をヨーロッパへ輸出し普及させた大浦慶など茶の歴史にまつわる人物を紹介するパネル展示や、製茶機械の見学コーナーがある。



1990年代にリクリット・ティラバーニャがニューヨークの画廊でバツタイ(タイ焼きそば)やカレーを振舞ったことがセンセーションを呼び、のちにリレーショナル・アートと呼ばれるムーヴメントの端緒として美術史の一ページを飾ることとなった。日本の歴史を振り返ってみると、ティラバーニャを遡ること約400年、16世紀には千利休が茶道を大成している。さらに明治期には日本近代美術の礎を築いた岡倉天心が『茶の本』(1906年)を英語

で著し、同じく英語で書かれた鈴木大拙の禅の著書とともに各国でベストセラーになった。利休や天心の試みを現代美術が獲得してきた視座から評価してみよう。茶室が日本の風土において成立するホワイトキューブのもう一つのあり方だとするならば、売茶翁の試みもまた日本の風土において成立する芸術のもう一つのあり方を私達に示してくれるだろう。(花田)



大茶樹



お茶ちゃ村



### 受講生の声

佐賀の文化を学ぶ機会はとても貴重だと感じる1日でした。

今日はありがとうございました。<コミュニケーション・マネジメント・問題解決デザイン>能力を磨きたい。地域、産業がアートと出会うことで、活性化、にぎわう仕組みづくり。

「アートカフェを知る・考える」

2017年8月18日(金)  
19:00~21:00

会場：シアター・シエマ

講師：  
野田恒雄「スペースを継続するために」  
Nadegata Instant Party (中嶋透+山城大智+野田智子)  
ワークショップ「アートカフェ、キックオフ」

受講者数：26名

Bコース  
アート  
マネジメント  
セミナー



シアター・シエマ



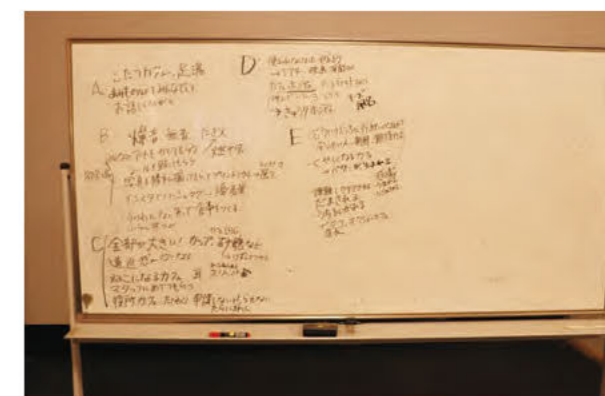
野田恒雄氏

アートマネジメントについて学ぶBコースのみの初回。  
会場となるシアター・シエマは2007年に開館した映画館でスクリーン2面を擁する。カフェを含むロビースペースでは、映画にまつわるトークイベントはもちろん、上映する映画の内容に関連させて環境や教育などの社会問題に関する研究会が開かれたり、また音楽の演奏会やヨガ教室などのイベントも頻繁に行われており、佐賀市における重要な文化サロンとなっている。

セミナー前半では、福岡市で「冷泉荘」「紺屋2023」などの建築再生プロジェクトを立ちあげ、運営してきた TRAVELERS PROJECT オーガナイザーの建築家・野田恒雄氏からスペース運営に関するレクチャーがなされた。短期・中期・長期の複数の時間軸を複層的に組み合わせながら運営をデザインする視点や、企画者個人のプライベートな関心と社会のパブリックな要素とを両極とするグラデーションの中で企画の力点を定めていく視点などが語られた。



Nadegata Instant Party



セミナー後半では、美術ユニット Nadegata Instant Party の軽妙なファシリテートにより、受講生全員が簡単に自己紹介した後4~5名ずつの5グループに分かれ、現実的な制約を考えずに自由にアートカフェについてのアイデアを話し合い、発表した。こたつカフェ、爆音カフェ、役所カフェ、感情を揺さぶるカフェ、など数々のユニークな案が出された。(花田)

### 受講生の声

「カフェ」とは・・・グループ意見交換ではみなさんのひらめきアイデアに感心しました。グループでの発表タイムで一気にお笑いムードで刺激ある2時間余りでした。お疲れさまでした。

アイデア出しはもう少し時間が欲しかったけど話し合いながらふくらんでいくのはとてもよかったです。

『佐賀県の文化芸術情報を伝える』

2017年9月23日(土・祝)  
10:30~17:30

会場：佐賀大学附属図書館

講師  
倉成英俊「文化を伝える、芸術を伝える」  
田原新司郎「アートの情報発信」  
藤生雄一郎「地域文化とローカルメディア」  
牛島清豪・杉本達應  
ワークショップ「ポータルサイト作りに向けて」

受講者数：26名



Aコース  
旅する  
セミナー

Bコース  
アート  
マネジメント  
セミナー

2017年9月23日、佐賀大学附属図書館にて、A・B両コース合同の講座とワークショップ「佐賀県の文化芸術情報を伝える」を実施した。

前半の講座では、3名の講師から事例の紹介やアートイベントの企画、広報に役立つ情報が提供された。

佐賀新聞社の藤生雄一郎氏は、地方紙の文化面を担当するデスクとして、日々受けとる展示会のプレスリリースの実例を紹介しながら、効果的に広報するためには、適切な量やタイミングに留意したり、読み手に関心を持ってもらえるように記憶に残るエピソードなどを挿入したりといったポイントを解説された。

NPO法人GADAGOの田原新司郎氏は、首都圏の現代アート情報サイト「Tokyo Art Beat」を運営する立場から、サイト運営の舞台裏が紹介された。運営主体のNPOは少人数のチームで、情報入力インターンの助けをかり、企業やミュージアムの広告収入を活動資金としているという。

電通の倉成英俊氏は、広告代理店でさまざまな事業をプロデュースする自称「21世紀のブラブラ社員」として、佐賀県のプロモーションビデオ、有田焼創業400年事業「ARITA EPISODE 2」、幕末の佐賀藩校の現代版「弘道館2」など、多くの企画の事例を紹介された。企

画を立てるときは、従来の企画とは異なる伝え方や方法に着目しているという。

講師の所属は、地方新聞社、アート情報サイト、広告代理店と三者三様。異なる業種ながら、いずれも文化芸術の情報発信に携わっているプロフェッショナルである。この連続講座を受講することで、今日の文化芸術情報の流れを多角的に把握することができた。



杉本達應



藤生雄一郎氏



田原新司郎氏



倉成英俊氏



牛島清豪氏

後半のワークショップは、地域情報化やオープンデータの専門家であるローカルメディアラボ代表の牛島清豪氏が進行し、佐賀ならではの文化芸術情報発信サイトのアイデアを出しあった。

はじめにSMAART事務局メンバーで佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授の杉本達應から、各地のアート情報サイトやフリーペーパーと、それぞれの運営体制、佐賀県のメディアの状況についての話題が提供された。

その後、佐賀県の文化芸術情報を発信するポータルサイトづくりに向け、受講生は6チームにわかれて企画を練りあげた。発表された企画案は、肥前窯業圏の情報を集約した「焼き物ミシュラン」、母親の生活やニーズ

に特化した「ママ頑張れ」など。前半講義を担当した各講師から、今後の企画づくりの参考となるコメントが寄せられた。

この日は受講生同士が交流する機会にもなった。冒頭、受講生が自己紹介をしたことで、県内外から集まった多様な顔ぶれを全員で共有できた。前半の講義の間には、Facebookに開設した「SMAART受講生グループ」のガイダンスを行い、多くの受講生がネット上でも交流できるようになった。終了後の懇親会では、受講生、講師、スタッフが親睦を深めた。午前から夜まで長時間にわたるプログラムで、多くの人と意見を交わす刺激の多い一日となった。(杉本)



受講生の声

今日は講義内容(3人の先生方)大変面白かったです。特に倉成さんの「佐賀はそのままアート(?)」の言葉に佐賀人として自信を頂きました。情報をアートするってなかなか大変ですね。日々アンテナをピピッと発信されたものをキャッチしないといけませんね。お疲れさまでした。

『佐賀県の伝統菓子文化を知る』

2017年10月15日(日)  
10:00~17:00

会場：佐賀大学本庄キャンパス  
見学先：深川家住宅 揚羽蝶・村岡総本舗羊羹資料館  
星巖寺・小城市立歴史資料館

講師：  
八百啓介「北部九州の菓子文化・シュガーロード」  
村岡安廣「菓子文化と地域づくり」  
佐々木保幸「フランスの菓子、パン文化と小売業」

受講者数：17名

Aコース  
旅する  
セミナー



八百啓介氏



村岡安廣氏

佐賀県内の地域資源を再発見するAコース。6月25日(日)有田エリアのやきもの見学、8月6日(日)嬉野エリアの茶どころ見学につづき、10月15日(日)に「佐賀県の伝統菓子文化を知る」回として、午前中には佐賀大学本庄キャンパスにて講師3名によるレクチャーを行い、午後にはバスにて小城エリアを見学した。

まずは北九州市立大学教授の八百啓介氏から「肥前佐賀の菓子文化：シュガーロード」と題して佐賀を中心に北部九州の菓子の歴史についての概説的なレクチャーがなされた。江戸期に長崎出島から陸揚げされた砂糖は長崎街道を通じて運ばれたが、同街道沿いの町々で種々の菓子文化が発達したことから長崎街道は別名「シュガーロード」とも呼ばれる。

つづいて佐賀県小城市に本店を構える老舗羊羹店「村岡総本舗」(明治32[1899]年創業)の代表取締役社長、村岡安廣氏から「菓子文化と地域づくり」に関する話がなされた。村岡氏は自身が九州の菓子文化についての研究者でもあり、佐賀県企業メセナ協議会の代表世話人として芸術文化支援に取り組むなど、企業の地域貢献活動に精力的に取り組んでいる。



佐々木保幸氏



関西大学経済学部教授の佐々木保幸氏からは「フランスの菓子、パン文化と小売業」とのテーマで、仏国では大型店舗の出店に対して小さな工房や店舗を保護するため、つまり手仕事の職人文化を守り継承するための公共政策がなされていることなどが話された。佐賀以外の地域、特に海外の事例を参照することで佐賀の状況を俯瞰することができた。

午後からバスで小城エリアに移動、カフェ「深川家揚羽蝶」にて昼食。国登録有形文化財である古民家の深川家住宅をリノベーションしたもので、落語、演奏会、蕎麦打ちの会なども行われている。



深川家 揚羽蝶(国登録有形文化財)



村岡総本舗羊羹資料館

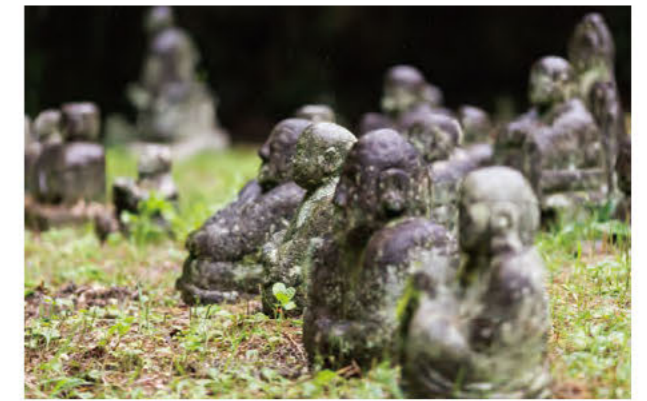
昼食後、村岡総本舗羊羹資料館にて羊羹の材料や製造の過程を見学した。村岡氏からは産業の継続のためには、職人の技術継承や人材育成、また味の違いを分かる消費者の存在が欠かせないことなどが話された。



星巖寺



五百羅漢 / 星巖寺



小城市立歴史資料館

つづけて黄檗宗の星巖寺を見学。売茶翁にゆかりある京都・萬福寺の末寺で、小城鍋島家歴代藩主の菩提寺として境内には歴代藩主の墓が並ぶ。いかにも中国風の楼門は佐賀県重要文化財に指定されている。

最後に小城市立歴史資料館を見学。小城エリアの歴史を概観できるほか、特に小城出身で「明治の三筆」に数えられる書家、中林梧竹の資料が充実している。(花田)



### 受講生の声

今日はいろいろ考えさせられました。Sugarや甘いものの位置づけが今の時代とは異なるのだとよくわかって興味深かったです。

佐賀のお菓子文化を広く知ることができた。文化ってつながっているんですね～。フランスの小売業のお話もとてもよかったです。

『文化芸術とお金の仕組み』

2017年10月20日(金)  
19:00~21:00

会場：シアター・シエマ

講師：  
吉村真也『企業の文化芸術活動』  
若林朋子『助成金を獲る～申請書の例』

受講者数：12名



吉村真也氏



若林朋子氏



アートマネジメントについて学ぶBコースのみのセミナー2回目は「文化芸術とお金の仕組み」をテーマに企業メセナ(企業による芸術文化支援活動)と助成金について学ぶ講座を開催した。会場は8月18日(金)と同じくシアター・シエマ。

セミナー前半では企業メセナ協議会の調査研究部会長である吉村真也氏から「企業の文化芸術活動」と題して、企業によるメセナ活動について、その考え方や手法が時代とともに少しずつ変遷していることや、自身の勤務先でのメセナ活動の事例について話がなされた。企業の文化支援活動として、かつては芸術家の求めに応じて芸術活動のための資金提供にとどまるものが多かったが、近年では企業の特徴や人材を活かして独自のプログラムを組むものにシフトしている。吉村氏の勤務先であるTOA株式会社では音響メーカーとしてノウハウと社内外の人材ネットワークを活かし、本社ビルに隣接する中学校にプロのミュージシャンやダンサーを派遣して一定期間で中学生たちによる舞台公演を仕上げているワークショップなどに継続的に取り組んでおり、一定の成果を上げている。

後半では種々のアートプロジェクトのコーディネーターに携わり、また立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科にて文化政策を教える若林朋子氏から助成金をめぐるレクチャーがなされた。自分たちの活動の“社会的意義”について明快に説明できるようコンセプトの強度を前もって詰めておくことや、応募しようとしている助成金の趣旨や過去の助成実績をつぶさに読み込むことの重要性などが話された。つづけて簡単な実践練習として、佐賀県内で実際に取り組まれている助成金プログラムの募集要項と応募書類を用いて部分的に申請書を書く作業を行った。(花田)



受講生の声

アートマネジメントに必要なお話が聞けてよかったです。でも申請書等の事はなかなか難しいですね。

“なぜアートカフェなのか?”の問いにしっかりと答えを出す事が出来ずいました。まだまだたくさんの情報を取り入れ学びたいと思いました。

「他県の取り組みを知る」

2017年11月4日(土)  
10:00~17:00

会場：長崎県美術館・長崎市内

講師：  
菊池一夫「まちづくりとサービスデザインの意義」  
的野寛「長崎さるくについて」

受講者数：15名



長崎県美術館



旅するセミナー最終回として、江戸時代に異文化交流の中心地であった長崎市へ出向いての講演会および見学会を実施した。長崎市は、日本(和)、中国(華)、オランダ(蘭)が混在した独特の文化が残っており、「わからん(和華蘭)文化」と呼ばれている。長崎出島は、古伊万里と日本茶の輸出起点であり、同時に砂糖の輸入拠点としてシュガーロード(長崎街道)の出発地であった。2017年度SMAARTのキーワードである肥前陶磁器、売茶翁、菓子文化の原点をなす都市である。

午前中は、長崎県美術館を会場として、2人の講師をお迎えしてセミナーを開催した。まず、明治大学商学部

教授の菊池一夫氏が「まちづくりとサービスデザインの意義」というテーマで講演され、続いて、長崎国際コンベンション協会の的野寛氏よりまちあるき観光「長崎さるく」の紹介があった。2人の講演に共通しているのは、(新規に何かを作るのではなく)都市の中に眠っている地域資源を掘り起こすことでまちづくりを推進すべきであること、および地域活性化にはコミュニティ再構築が何よりも重要であること、この2点であったように思われる。セミナー終了後には、学芸員の案内のもと、長崎県美術館常設展示室を鑑賞する機会をもった。ちょうど企画展示室では長崎市出身シンガーソングライター「さだまさし展」が開催されていた。



菊池一夫氏



長崎さるく参加



的野寛氏







長崎新地中華街

午後からは、「長崎さるく」を実際に体験する試みとして、市内を散策しながら異文化交流の歴史的痕跡を訪ね歩いた。シュガーロードをメインテーマとして設定し、市内の菓子文化(老舗菓子店)を巡るコースである。スタートは、近年ほぼ完全なかたちに復元された出島の見学であった。周知のとおり鎖国時代における唯一の貿易窓口であり、砂糖流通の基点といえる場所である。その後、出島から徒歩5分程度の場所にある新地中華街を訪れて中華菓子(月餅、よりより)を試食した。次に、長崎市における最大かつ最古の商業集積地である浜の町界隈に移動した。観光通り商店街で洋菓子(チーズの焼き菓子)を味わった後、そこから眼鏡橋方面へ細い路地が伸びる中通り商店街で和菓子(干菓子、カステラ)を試食した。まさに、和・華・蘭(洋)の菓子勢揃いの行程を巡ったことになる。



興福寺



途中で売茶翁と関連の深い黄檗宗寺院、国指定重要文化財の興福寺に立ち寄った後、菓子文化体験の最後の訪問先は長崎カステラの老舗店だった。カステラは、洋菓子なのか和菓子なのか、見解の分かれるところだが、長崎で独自の進化を遂げた菓子であることは間違いなく、いわば和洋中の混在した長崎文化が生み出した作品とってよいだろう。

余談であるが、料理を賞味して「長崎が近い」といえば「甘くて美味しい」を意味しており、貴重品だった砂糖を贅沢に使うことができた当時の長崎庶民の生活の豊かさを今に伝える逸話であろう。(西島)



### 受講生の声

街づくりの大切さに気が付けた。「街」を見る視点を得た。10年後の自分の生活を考えて、とスタートしたお話と、実際歩いた長崎の街の様子がとてもびったりで分かりやすかった。長崎の街は恒例の方も多く、幸せそうに歩かれていたのが印象的。

砂糖というのが富そのものだったこと、よくわかりました。長崎の豊かさのレベルが想像以上でした。北部九州の文化芸術について講座前にはあまりよくわからずにいたのが、少しずつ理解できて来たかなと感じています。誰に向けて発信すれば佐賀が、例えば10年先に笑顔がたくさんある場所になるのか、はまだみえません。



OFF MEETING

## Part. 1

『アートカフェミーティング』  
『ポータルサイトづくりミーティング』

2017年10月27日(金)  
18:30~20:00

会場：佐賀大学本庄キャンパス

12/9(土)のアートカフェに向けての話し合い・準備、具体的なアートカフェの企画案を練っていく。

受講者数：10名



本年度のSMAARTは「スタートアップ入門編」ということでプログラムのほとんどが座学および見学を通じて知識を習得すること、つまりインプット作業が中心であったが、一年の講座の締めくくりとして12月9日(土)をアウトプットの日と設定し、何らかの簡単な実践に取り組む日を設けた。受講生募集の段階では一日アートカフェの試行実践に取り組むとしていたが、現実的な諸条件をふまえ、アートカフェのアイデア発表会を行うこととした。

その発表会に向けての課外活動としてオフミーティングを2回に分けて行った。

オフミーティング1回目では、発表会までの準備をどのように進めるかの段取りについて、あるいは当日のおよその構成などについて話し合った。受講生によって「アート」に関する知識や関心の差が大きいため、アイデア考案の身近な入口として「地域課題」を切り口としながら考えてもらってはどうかなどの案が出された。



OFF MEETING

## Part. 2

『アートカフェミーティング』

2017年11月17日(金)  
18:30~20:00

会場：佐賀大学本庄キャンパス

12/9(土)のアートカフェに向けての話し合い・準備、具体的なアートカフェの企画案を練っていく。

受講者数：9名



オフミーティング2回目は発表会に向けた予行演習としてアートカフェの具体的なアイデアについて各自考え、出し合った。有明のりカフェ、クリーク舟上カフェ、投擲カフェ、焚火カフェ、土カフェ、しつけカフェ、などのアイデアが出された。

2回目のミーティングで出てきたアイデアの一つに「写真セラピーカフェ」の案があったが、これであればワークショップ形式の一日イベントとして行えば、それほどハードル高くなく実現でき、運営者側も参加者側も関わりやすいだろうということで、急ぎ1月20日(土)に実践する運びとなった。(花田)

「アートカフェアイデア発表会」

2017年12月9日(土)  
14:00~17:00

会場 佐賀大学本庄キャンパス

講師 森 司

Nadegata Instant Party  
(中崎透+山城大督+野田智子)

発表者 西ノ首有里子・井上栄信・  
志波環恵・小石克・古賀隆正

受講者数 21名



Aコース  
旅する  
セミナー

Bコース  
アート  
マネジメント  
セミナー

井上 栄信 「里山カフェ～例えば、落ち葉焚きカフェ～」 「野点/野掛け for Cyclist」

**SMAART** 2017.12.9

お名前 井上 栄信 コース Aコース+Bコース

カフェタイトル  
里山カフェ～例えば、落ち葉焚きカフェ～

アートカフェのコンセプトやポイント

最近、外で遊んでいる子供たちを見かけなくなった。そこで、子供と一緒に日ごと、遊ぶ場所をお家から見守る。昔遊んだ公園では禁止されていることをイロイロ体験出来るカフェ！

そこで、里山のあちこちにちがってある木や草花を採り、落ち葉焚きをする。その焚き火を使って、簡単な炭焼きの器や土鍋、お芋やジャガイモを焼いてみるのはどうだろうか。有難いお土産には、木と木の間にハンモックを掛ける。お楽しみ、体験したり... 木々が色づく様には、コーヒーを手に、ただただ楽しむだけでも。

野点/野掛、フリーハウス、園芸小園(ガーデン)を作る。出来るだけ手軽に、どこでも出来るように設計出来る。また、簡単に出来るように設計出来る。

アートカフェのイメージ図

カフェ自体は、ログタイプやタープ、ソーラーなどを使う。賑々しかった子供が居るテントも用意しておく。

折り畳み式の椅子、テーブルを用意し、カフェを利用する人に貸出し、思い通りの場所に設置してもらう。

休憩用テント 台所テント テーブル(作業台としても使用する)

野点/野掛(ちがってアーティスティックに！) 子供たちの基地としても使用

野点/野掛の作り方や手順のWSを準備する。子供たちが集めてきた木や草花を使って焚き火を焚く。焚き火の熱を利用して、お芋やジャガイモを焼く。焚き火の熱を利用して、お芋やジャガイモを焼く。焚き火の熱を利用して、お芋やジャガイモを焼く。

※すべてのモノが簡単に持ち運べること

SMAART 事務局

**SMAART** 2017.12.9

お名前 井上 栄信 コース Cコース+Bコース+Aコース

カフェタイトル  
野点/野掛 for Cyclist

アートカフェのコンセプトやポイント

自転車乗りのためのお休みの場を！ロードレーサーに乗って出かける。途中で休憩したいと思っても、たいがいコンビニや自動販売機の前で済ませるだけで済むことになりません。(自動販売機の前で済ませることは出来ません。)

そこで、自転車乗りがゆっくりと楽しめるカフェを作ります。野点/野掛を使う。焚き火の熱を利用して、お芋やジャガイモを焼く。焚き火の熱を利用して、お芋やジャガイモを焼く。焚き火の熱を利用して、お芋やジャガイモを焼く。

野点/野掛、フリーハウス、園芸小園(ガーデン)を作る。出来るだけ手軽に、どこでも出来るように設計出来る。また、簡単に出来るように設計出来る。

アートカフェのイメージ図

道路

サイクリング

サイクリングロードに子供たちが集まる。焚き火の熱を利用して、お芋やジャガイモを焼く。焚き火の熱を利用して、お芋やジャガイモを焼く。焚き火の熱を利用して、お芋やジャガイモを焼く。

※すべてのモノが簡単に持ち運べる

SMAART 事務局



SMAART「スタートアップ入門編」の締めくくりとしてアートカフェのアイデア発表会を行った。受講生間でアートに関する知識関心の度合いや能動的に活動に関わる度合いも様々ではないため、受講生全員ではなく発表者を募る形で行うこととし、結果的に5名の発表者が各自のアートカフェの案についてプレゼンテーションを行った。

西ノ首氏は「お一人様カフェ」と題して、SNSなどのデジタルメディアではなく、カフェに置かれた自由帳を通じてアナログにつぶやきを共有するというアイデア

ほか、手紙をめぐるアイデアが出された。全てがスピードを増してゆく現代社会においてスローなメディアを見直すもの。ちなみに本人はデジタルメディアを通じてコミュニティ活動をバックアップする仕事をされている。

井上氏はアウトドアライフに関する2案の発表を行った。一つはサイクリストたちが一時的に休憩できるカフェ。もう一つはキャンプ場での自然体験をより楽しむためのカフェ。ともに移動式で臨時かつ簡単にセッティングできるという前提。フットワークの軽さの参照としてプレゼンの締めくくりチェ・ゲバラの肖像が出てきて一同驚く。

西ノ首 有里子

「おひとりさまカフェ  
～とにかく、なんか書きたくなる～」

**SMAART** 2017.12.9

お名前 西ノ首 有里子 コース A+Bコース

カフェタイトル  
おひとりさまカフェ ～とにかく、なんか書きたくなる～

アートカフェのコンセプトやポイント

外に出て、一人で読書やゆっくり読めるカフェ。スマホなどなくても、本や雑誌、新聞などがなくとも読書が出来るカフェ。とにかく、何か書きたくなるカフェ。

◆そのカフェには「自由に読める本棚」が複数設置してある。

◆本棚を囲んで、テーブルに椅子を並べ、読書が出来るようにする。読書が好きなものも置く。新しい本棚に書き込みのスペース、ノートや付箋を添える。

◆そのカフェには「読書の自由帳」が置いてある。書くことも出来る。

◆自由帳を添えるか？「読書の自由帳」の自由帳が読書した本の紹介など、読書の自由帳の自由帳に添えるか？

◆そのカフェには「お手紙、お楽しみ～」サービスがあり、手紙を書きたくて居るお客さんが書いてある。自由に書いてもらい、自由に書いてもらい、自由に書いてもらい！自由に書いてもらい、自由に書いてもらい、自由に書いてもらい！

◆そのカフェには「読書家カフェ」が出来るように設計出来る。自由に書いてもらい、自由に書いてもらい、自由に書いてもらい！

アートカフェのイメージ図

読書家カフェ

読書家カフェ

読書家カフェ

SMAART 事務局



## 小石 克

### 「モバイル・カフェ(アート屋台)」



**SMAART** 佐賀県モバイル・アカデミー・オブ・アート 2017.11.9  
アートカフェ アイディア発表会

お名前 小石 克 コース Aコース Bコース A+Bコース

カフェタイトル  
**モバイル・アート・カフェ(アート屋台)**

アートカフェのコンセプトやPRポイント

**アート屋台が、人と人、アートと人を繋げます。**

- **日中:** アート案内所や、アーティストによるワークショップの拠点として。  
ターゲット: 観光客・アート初心者 → アートに触れる、広げる
- **夜:** アーティスト自らマスターになり、ファンとの話しの場。  
ターゲット: アーティスト、ギャラリ、アートファン → アートを深める、繋げる

屋台で運営を続ける。アーティスト任せで6年間をかけた運営で  
**気軽に出て行き、人を繋げる「おせっかい」を。**

アートカフェのイメージ図

**昼営業**

● アーティスト自身が「アート・バー」のマスター  
● 接客マスターでワークショップ  
● 語り足りないお茶、一長さんの交流に  
● 電気、WiFi設備でシェアする

**夜営業**

● アーティスト自身が「アート・バー」のマスター  
● 接客マスターでワークショップ  
● 語り足りないお茶、一長さんの交流に  
● 電気、WiFi設備でシェアする

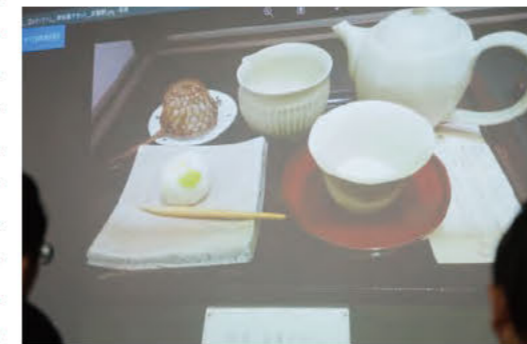
SMAART 事務局



小石氏は「アート屋台」を通じて、昼はアーティストによるワークショップを展開、夜はアルコールを交えつつアーティストが客と芸術談議に花咲かせるというもの。佐賀の文化をめぐる実情や運営組織の在り方にまで踏み込む内容であった。

## 志波 環恵

### 「SAGAの財(器・茶・菓子・ヒト)を楽しむアートカフェ ~ココロもカラダも元気に~」



**SMAART** 佐賀県モバイル・アカデミー・オブ・アート 2017.11.9  
アートカフェ アイディア発表会

名前 志波 環恵 コース Aコース Bコース A+Bコース

カフェタイトル  
**SAGAの財(器・茶・菓子・ヒト)を楽しむアートカフェ ~ココロもカラダも元気に~**

アートカフェのコンセプトやPRポイント

- ① その日の気分(ココロ)や体調(カラダ)に合わせて、茶・菓子や器を選びテーマを決める。  
- 茶の機能性が高く、カラダ(成分)のデキに、ココロ(成分)にも良い。  
- 好みに合うものを選ぶことで満足感が高い。(ココロが喜ぶ)  
- 茶種は県内の産物・産地・産地などを、菓子は県内産・産地産物利用菓子から選ぶ。
- ② テーブルに置く時、お茶の淹れ方と茶器・菓子などの説明もする。(資料あり)
- ③ 大きなテーブルで居るなどして、他の人との交流ができる。(一人でOK、団体だと縁が見える)

【おまけできること】

- ワークショップ(日本茶講座・ブーチャーズ講座・アロマ・マニキュア講座、その他)の開催
- 実習(煎茶・ほうじ茶づくり、抹茶アート、お菓子作り、小物づくり、その他)の企画
- 他業の茶を飲みながら、世界の茶種を堪能するイベントの企画

【コラボ可能なアート】 ● 下記のように受講生の皆様からのご提案をお願いします。】

- テーブルや壁等に黒板(ホワイトボード)や看板(看板)などを飾る → 職人さんの協力が必須
- 定期的に絵画や写真、オブジェなどを展示会形式で飾る → 作家さんの協力が必須
- 生演奏や、街頭歌など音を楽しく空間づくり → 音楽家さんや演劇家さんの協力が必須

アートカフェのイメージ図 ● テーブルは円形でも可 ● テーブル・椅子の数は部屋の大きさまで決める。

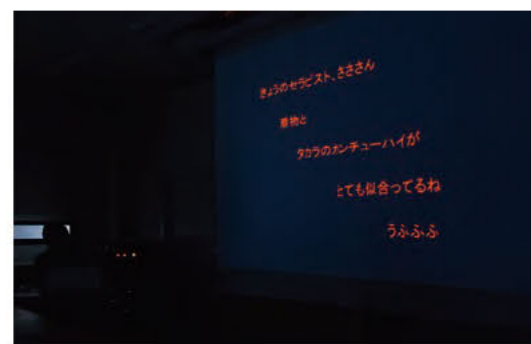
SMAART 事務局



志波氏はバイキング形式のように複数の種類が用意された有田焼、嬉野茶、小城羊羹の中から自分の好みの組合せで日本茶体験を楽しむというもの。自身の心理カウンセラーとしての経験や日本茶インストラクターとしての経験を佐賀の地域資源に結びつけながら発想されている。

# 古賀 隆正

## 「meisou\_Suru\_Cafe」



**SMAART** 2017.11.9

お名前 **古賀 隆正** コース **A&B コース**

カフェタイトル **「meisou\_Suru\_Cafe」**

アートカフェのコンセプトやポイント

1. 即興演奏の促め
2. Meisou\_Suru\_Cafe は「ミュージック スペース」「カクテル スペース」
3. 好きな方法・好きな道具で自分を癒してください (オト・映像・即興演奏 anything else?)
4. 「アブストラクト」の促め
5. 「覚醒」「瞑想」を切りかえる「switch」の設置場所と操作方法の確認
6. 最期の曲を選択するときの注意点
7. 抽象的生き方のワークショップ開催 (毎週・火曜日 18:15より 6階地下食堂)

アートカフェのイメージ図

SMAART 事務局

**SMAART** 2018.11.9

お名前 **森 恵** コース **Aコース・Bコース・A&Bコース**

カフェタイトル **カフェタイトル**

コンセプト

アートカフェのコンセプトやポイント

店内でアートパフォーマンスを楽しんだり、インスピレーションのアートなカフェ

新しく、楽しく、美しく、健康をアートするカフェ

即ち「健康、もっかいな!!」

ずっとハロウィンカフェ

いつも以上に楽しむカフェ

21世紀の歌声喫茶カフェ

健康していく音楽っぽい音楽を、映画をつくるカフェ

好きなように演奏しましょう!

みんなボスベルカフェ

地域地帯がアートになる、自分で料理をつくるカフェ

「アートカフェ」のイメージ図

SMAART 事務局

# 森 恵

**SMAART** 2017.12.9

お名前 **江口 博子** コース **Aコース・Bコース・A&Bコース**

カフェタイトル **TUMUGU カフェ**

コンセプト

アートカフェのコンセプトやポイント

店内でアートパフォーマンスを楽しんだり、インスピレーションのアートなカフェ

新しく、楽しく、美しく、健康をアートするカフェ

即ち「健康、もっかいな!!」

ずっとハロウィンカフェ

いつも以上に楽しむカフェ

21世紀の歌声喫茶カフェ

健康していく音楽っぽい音楽を、映画をつくるカフェ

好きなように演奏しましょう!

みんなボスベルカフェ

地域地帯がアートになる、自分で料理をつくるカフェ

「アートカフェ」のイメージ図

SMAART 事務局

# 江口 博子 「TUMUGUカフェ」

後日、別のアートカフェアイデアも提出されました!

古賀氏は言葉によるプレゼンテーションではなく、自身が演奏した実験的な現代音楽とポエムとで構成されたイメージ動画を流して、“アブストラクト”(抽象的)な表現に出会えるカフェを提案。カフェ案の内容もさることながら、音楽の前衛性とプレゼン方法の斬新さに感心させられた。

5者それぞれに自身の普段の活動をふまえて考えられたアイデアで聞きごたえのあるプレゼンテーションであった。

発表後は森司氏と Nadekata Instant Party によるコメント。発表者たちのクオリティ高い発表に敬意を払った上で、その意欲に呼応するべく手厳しいコメントも繰り返され、さらには講座全体に関する振り返りも含め、受講生まじえ率直な意見交換がなされた。(花田)



### 受講生の声

発表者の皆様素晴らしいかったです。自分も頑張りたいです。既存のプランよりせっかく学んだのだから新しさも取り入れたいと思いました。

とても面白かった!この先の展開が楽しみです。

本日、5人の発表をしてくださった方々にはまずはお礼申し上げます。それぞれの得意なことや趣味からの発想にとってもユニークで面白い企画ばかりだったと思います。素晴らしいプレゼントでした!!



「アートカフェ 実践編」

2018年1月20日(土)  
10:00~17:30

会場：シルクロ  
講師：若林朋子・倉成英俊  
サポーター：9名

「街歩き写真ワークショップ」

13:00~16:00

講師：鷹野隆大  
一般参加者：10名

シルクロ

12月9日(土)のアートカフェアイデア発表会に向けての準備を進めていく中で、2回目のオフミーティングにて挙げた「写真セラピーカフェ」のアイデアを基に、一日ワークショップの形で実際に行い、SMAART受講生にサポーターとしてアートイベント運営を体験してもらう運びとなった。受講生のうち9名からサポーター希望の申し出があり、その中でITに詳しいメンバーによって連絡用メーリングリストが開設された。会場・日時・講師・テーマ設定・予約受付をSMAART事務局側で担当し、サポーター間でチラシ配布・SNS広報・会場設

営・入口受付・司会・ワークショップ参加者補助・記録写真・報告文作成・懇親会セッティングなどを役割分担しながら進めた。以下の報告文および本ワークショップの記録写真はサポーターによるもの。当日は細かな反省点はあるもののワークショップ参加者もサポーターもそれぞれ満足度高く、イベント運営実践は無事成功裡に終わった。受講生有志によって本ワークショップ後もスピンオフの自主企画が立ち上がったことが本年度SMAARTの大きな成果といえよう。(花田)



1/20(土) アートカフェ実践編  
「街歩き写真ワークショップ」  
受講生によるレポート

これまで学んだ知識等を生かして「アートカフェ」開催手法を習得することを目的とした「街歩き写真ワークショップ」を開催した。会場は佐賀市内のギャラリーである。Aコース及びBコースの受講者の中からワークショップサポーターを募集した結果、最終的に9人が参加した。開催日時・場所、講師は事務局が決めるも、内容や進め方などの打ち合わせにはサポーターも参画した。

鷹野隆大氏を講師にテーマ「日常に会い直す」の「街歩き写真ワークショップ」を企画。街歩きをしながらスナップ写真を撮り、撮った写真を持ち寄り講評会を行う。ギャラリーのカフェで一服しながら私たちの日常を振り返ってもらうワークショップである。

当日、事務局及び運営スタッフの受講生が集まり、ワークショップの進行や会場レイアウトを最終決定するとともに担当内容の確認も行った。

昼食後、会場設営を行い参加者の来場を待つ。



鷹野隆大氏





受付を開始し(受付担当:受講生2人)、ワークショップが開会。まず、開会挨拶並びに講師紹介をSMAART事務局(花田)が行う。その後、進行を担当するサポーター(受講生)より、スケジュールやワークショップの内容などの説明があった。

参加者とサポーターがペアリングして、会場のギャラリーを出発し、思い思いに街歩きを始め、写真を撮る。

ギャラリー到着順に参加者2人でペアを組み、2人が撮った写真の中から20枚程度に絞り、「テーマ」や「タイトル」を決める。写真の並び替えやBGMの音楽を決めるなどしてスライド上



映作品を作り上げる。サポーターは参加者のスキルに応じて操作補助や写真選び等のアドバイス、タイムキーパーなどを行った。

1グループ10分程度を目安に、スライド上映並びに講師からの講評がなされた。コーヒーや紅茶、お菓子で一服しながらの発表である。講師の講評としては、写真から伝わるイメージやストーリーづくりの視点などを話されるとともにタイトルに即した写真の並び替えや不要な写真の削除後の再上映を行われた。5組がそれぞれが短い時間ながら、いい作品をつくりあげた。



### ワークショップ 参加者の声

写真はよく分からなかったのが不安もありましたが、担当スタッフの方も優しく、楽しく街を歩くことが出来ました。プロの方の講評も聞くことが出来て、今後いかしていけたらなーと思います。また、初めての人も参加しやすいものがあれば参加したいです。

やはりもっと大学生など、若い人が多く参加できていたら、もっと刺激ある会になったのではないかなと思いました。しかし、自分個人で言えば、第一線で活躍している作家さんと写真のことについてじっくり語り合えたことは、貴重な体験でした。

閉会后、事務局(花田)の進行のもと、事務局と運営スタッフの振り返り会を行う。運営スタッフの受講生10人より感想・反省点を発表後に前回までの講師2人(若林氏、倉成氏)SMAART事務局スタッフ3人(小坂、西島、杉本)により講評をいただいた。

延べ8回の講座(うち3回が2コース合同)と本日のアートカフェ実践(運営体験)を開催したが、参加した受講生が、各々でアートカフェを自主開催していけたらと思う。



### SMAARTアドバイザーによる講評

#### 若林朋子氏 談

会場に入った時から感じていたのは、イベント運営側の空気・雰囲気が出るのでいいなということ。チームワークの良さや、自主的に動けるところ、それぞれに慣れていて自分の持ち場をまわしているところもよかったです。

今後、企画が大きくなると、参加人数が増える、集客、サポーター制度、マネジメントなど次の課題がでてきます。自主的に企画をやっていくなら、そのところをどうしていくのかを話し合っていくといいと思います。

6月の講座から見えてきて、受講生の中から、自主的に企画を展開していけたらいいね、という流れが出てきたことはすごいことだと思います。今年度の成果として、すごく意義がある講座だったのではないのでしょうか。



#### 倉成英俊氏 談

まず、運営する側の空気、司会のテンションのすばらしさを感じました。オープニングのテンションはすごく大事だし、意識の高いサポーターの自主性もすばらしい。

また、反省会で述べた自分の気づきは忘れないので、宝になりますよ。

次に開催時間が延びることについて、参加者にとってはどうであるかを考えてほしい。全部が全部、時間を延長しない方がいいとは言えないけど、あわよくば時間は伸びない方がいいと思います。

最後に、「中身」。来てくれた人に何を持って帰ってもらうか。

「日常に会い直す」というテーマだったが、きちんと出会い直して帰れたのか。企画の中身によって、何をもって帰ってもらうかが違うので、その計算が出来れば、意義を結び付けてやれるといい企画になると思います。

出合いが増えることは、みなさんにとっても、佐賀にとっても意味になることだったんじゃないでしょうか。仕事やプライベートなどこかで繋がってくるかもしれないから。

### サポーターの声 - 企画にふれてみて -

ICT機器を使っている事前のチェックが必要だ!!トラブル時のマニュアル対応も必要だと思った。大変いい経験になりました。

自分の思い、イメージを具体化、形にしていくことに役立てたいと思います。

小石さんの司会やほかの皆様、こういうイベント時の身の振る舞い方を参考にさせていただき、今、町なかのイベントも多いので、お役に立ちたいと思います。

受講生と一緒にワークショップ開催を実現したいと思った。今回の会場となったシルクロさんで、別のイベント等を開催してみたいと思った。

講師を招いてのワークショップ形式のイベントも試してみてもいいかな...

今後ワークショップやイベントなど開催する場合は、もう少し事前準備を万全にする必要があると感じました。会場レイアウトなどは事前に大まかに作成しておくほうがよいと思いました。

# SMAART

## プロジェクトメンバー

## エッセイ編

### 受講生の声

はじめのうちは大人の遠足気分で参加させて頂いておりました。  
しかし、最後にはすごく楽しくなっている自分がいました。

何か生まれそう。もっと開放的に双方向のコミュニケーションがされたものが  
あればもっと楽しい講座になり、人に勧めたくなります。

「カフェ」と「アート」の定義を決める、話し合う場があると、より良かったと  
思います。  
今年度のメンバーを対象としたフォローアップ講座があると好ましいです。

社会人の中に一人学生として入って様々な意見に触れられる機会として  
とても良かったです。もっと交流の場があると嬉しかったです。

私は佐賀出身ですが佐賀の知らなかった文化、知っていたこと  
の新しい側面が知れてとても良かったです。ありがとうございました!!

活動に参加させていただきありがとうございました。非日常的な空  
間及び発想に刺激を受けることが多くありました。今後自分自身の  
発想力をさらに高めつつ深めていきたいと思えます。







## 「芸術で地域を拓き、芸術で世界を拓く」

### ー芸術地域デザイン学部と地域の芸術振興

小坂 智子

佐賀大学芸術地域デザイン学部は、佐賀大学で最も新しい学部として、2016年4月に誕生した。「芸術で地域を拓き、芸術で世界を拓く」をきっかけ、「芸術を通して、地域創生に貢献する人材」を育成することを目標としている。

本学部には、芸術を自ら創造・表現する人材を養成する「芸術表現コース」、文化芸術を支え、新たな付加価値を生み出し、地域創生に貢献する人材を養成する「地域デザインコース」の2つのコースが設置されている。芸術は、創造する人がいることで成り立つことは言うまでもないが、創造する行為には、社会状況や環境などが深く関係している。さらに、生み出されたものを受けとめる人や社会があって、はじめて芸術として成立する。芸術の力を社会において生かしていくためには、創造する人だけでなく、支える人やその価値を認め、発信することのできる人の存在も不可欠である。本学部はこうした芸術と社会の関係に目を向け、2つのコースに基づく教育課程を編成している。

2017年4月には、佐賀県有田町に、佐賀大学有田キャンパスが設置された。佐賀県立有田窯業大学校が本学と統合し、窯業人材を育成することを目的とし、芸術地域デザイン学部芸術表現コース有田セラミック分野の学生は2年生から有田で学ぶ。日本磁器誕生以来400年の伝統を誇る有田焼の生産地で、技術に裏打ちされた伝統、新しいデザインの発想、そして陶磁器の流通やマーケティングなど、幅広い視野から“焼き物”全般に取り組む。

佐賀という土地に立脚し、その伝統文化の一翼を担いつつ、新しい芸術文化を創造し、発信できる人材を育てることが、学部の使命といえることができる。佐賀大学憲章は「(…)豊かな自然溢れる風土や諸国との交流を通して育んできた独自の文化や伝統を背景に、地域と共に未来に向けて発展し続ける大学を目指し(…)」と謳う。今回、SMAARTで、私たちが試みたことも、佐賀の文化資源を見直すことから始まった。

私たちがSMAARTの事業に取り組み始めたのは、学部の目標である「芸術を通して、地域創生に貢献する人材育成」を進めるためには、地域との連携が不可欠であり、同時に地域における文化芸術振興に関わる人びととのつながりを広げることや、そうした関心を持つ方々に対して、学部の持つ資源(教育、研究、人的)を提供することが、地域における佐賀大学としての役割であると考えているからである。

SMAARTの初年度の活動を終えたところで、課題も見えてきたが、すでに形作られはじめた受講生や地域との関係の中から、芸術文化を育み楽しむ人びととのつながりが生まれはじめている。



## まちづくりの中の「アートカフェ」

### ーまちの賑わいと回遊の拠点

西島 博樹

大学院に入学して偶然にも商業論を専攻することになった。たまたま師事した先生が商業論、より正確に言えばマルクス経済学に依拠した商業論の碩学であったという偶然である。最初に教えていただいたのは、「商業は価値を生み出さない」、「商人の労働は不生産労働である」というショッキングなものであった。「それならば商人の利潤はどこから生まれているのか」という疑問が当然浮かぶのであり、その論理は容易には理解できない難解さがあった。一方で、マルクス経済学に対峙するいわゆる近代経済学では、生産者と消費者が直接取引する世界(市場メカニズム)が延々と描かれる。つまり、商人がそこに登場する余地はまったくない。要するに、マルクス経済学では価値を生まないと断言され、近代経済学ではその存在を無視され、商人は(極度に抽象化された理論)経済学の教科書の中で差別的ともいえる不当な扱いを受けているのである。

この不当な扱いの深淵には、商人が「商品をただ右から左に流すだけで、楽をして利益を得ている」という見かけ上の印象があるのだろう。もちろんこれは商人に対する誤った理解である。現実の商人は、地域社会において欠くことのできない存在であり、地域住民の一員として大切な社会的役割を果たしている。商店は地域の生活空間に寄り添って商業集積(商店街)を形成する。そこに多くの人々を引き寄せ、まちに賑わいを創出し、まちの個性(アイデンティティ)を形成する。商店街は、買い物の場としてだけでなく、憩いの場として、散策の場として、情報交換の場として、多くの機能を住民に提供してきた。ところが、この商店街が全国的に瀕死の状態にある。

さて、そこでアートカフェである。アートカフェは、アートというネタに惹かれて集まってきた人々が、コーヒーを飲みながら、わいわいがやがやと自由気ままに議論を戦わせる場である。この理解が正しいならば、失われかけた地域のコミュニティを復活させる切り札として期待される。しかし、懸念もある。カフェが閉鎖的なコミュニティ(いつも同じメンバーという限定されたコミュニティ)を形成するだけならば、それは単なる同好会にすぎない。いわば将棋クラブや囲碁クラブ、テニスサークルと同じであり、やはりもの足りない。

魅力的で開放的なアートカフェが、地域住民だけでなく、観光客をも引き付け、その賑わいが内部に留まるのではなく、それが外部に向かって拡散する。経済学ではこれを外部効果と呼んでいる。SMAART(芸術を通じた地域創成人材の育成講座)のゴールが、「疲弊した地域を元気にする、そのための人材を養成する」ことにあるならば、アートカフェに期待するのは、まちの回遊を誘導し、まちに賑やかさを取り戻す起爆装置としての役割であろう。



## 偶然の出会いがあふれるまちへ —SMAARTのネットワーキング

杉本 達應

SMAARTでは「ネットワークづくり」を取り組みのひとつにしている。ネットワークとは、網目状になった組織や構造のことだ。鉄道網、電力網、道路網、放送網、コンピュータネットワーク——。そして、人と人のつながり、人間関係からなる私たちの社会も網目模様になっているネットワークだ。

SMAARTがつくるネットワークは2種類ある。ひとつは、人と人との出会い、フェイス・トゥ・フェイスの関係だ。もうひとつは、インターネット上での交流だ。つまり、オフラインとオンラインの双方からなるネットワークである。どちらも地域の文化芸術に関心をもつ人や、実務として携わっている人を対象としている。

人と人の交流は生身の人が関わりあう、いわばナマモノのネットワークであり、人工的につくろうとしても難しい。ふだん生活や仕事を共にしているご近所さんや同僚などのネットワークなら自然に生まれる。一方で、思いがけない出会いからネットワークができることがある。偶然の出会いは、家庭でも職場でもない場所からはじまる。哲学者や芸術家たちが集まったという19世紀のパリのカフェのように、多様な人びとが立ち寄る場所がその典型だ。

SMAARTは、そんな偶然の出会いを増やすことに貢献できそうだ。いや、もうすでに地域を超えたネットワークの素地はできあがりつつある。なにしろSMAARTでは、受講生をはじめ、講師陣、事務局スタッフが県内外から集まってきているのだから。さらに、各地で豊富な活動経験をもつメンバーが揃っている。SMAART事務局のメンバーの多くが佐賀県外の出身者なのも興味深い。地域のことをよく知らない人間は、旧来のしがらみに縛られず、地域を客観視できる力をもっている。

地域の文化は、新旧とりまぜた多様な人々のネットワークが存在することで、より豊かになる。地域には、その地を代表するとされる歴史や伝統、産業のほかにも、まだ発掘されていない資源や人が眠っているからだ。複数のネットワークからいろいろな角度で光をあてれば、意外なモノやコトが発見されるだろう。幸運を招き寄せる力「セレンディビティ」——ペルシャのおとぎ話『セレンディップの三王子』の主人公にちなんだこの言葉は、現在では人間の能力として使われている。しかし実は、地域や場所がもつ潜在的な力だととらえることもできるのではないだろうか。

SMAARTの3年間という期間限定の試みが、小さな種となり、地域のセレンディビティをひきだし、人々の偶然の出会いから思いがけない展開を生むかもしれない。2017年度は、FacebookでSMAART受講生グループが立ち上がり、オフライン、オンラインの交流が進んでいる。2018年度からは、佐賀県の文化芸術情報を発信するポータルサイトを始動する予定だ。これからの活動を通じて、このまちにさらなる「網目」が重なりあっていくことを願っている。



## カフェと芸術と大学と

花田 伸一

私が北九州市立美術館の学芸員だったころ<sup>(※1)</sup>、同館の開館理念である「リビング・ミュージアム」<sup>(※2)</sup>はいかに可能だろうかと大真面目に考えていた。展覧会をリビングなもの＝生き活きとするには、時間の要素を持ち込むことや、日常生活の要素とりわけ飲食の要素を持ち込むことが欠かせないと私には思えたが、展覧会とは基本的に会期中あまり形を変えないものだし、ご存知の通り展示室において飲食は厳しく制限される。必竟、ミュージアムをリビングにするという理念にはかなり無理があると感じていた<sup>(※3)</sup>。翻って美術館を辞め、地域でのアートプロジェクトに取り組むようになってから飲食を伴うものがぐっと増えて一息ついた。地域で飲食しながらアートをリビングに展開していたところ、このたび大学の看板を携え「芸術地域デザイン」を謳いながら地域に出ることになった。

私がこれまで携わった中で飲食を伴う表現活動を振り返ってみると、川俣正《コールマイン田川プロジェクト》(北九州市立美術館、2001年)、白川昌生《無人駅での行為(群馬と食)》(北九州市立美術館、2003年)、『千草ホテル中庭PROJECT』(北九州市、2008～15年)、きむらとしろうじんじん《野点》(北九州市、2010年)、和田千秋+中村海坂+坂崎隆一《障碍の茶室V—無碍》(韓国・釜山市、2014年)、『CASASAGA』(佐賀市、2016年～継続中)、『槻田アンデバンダン』(北九州市、2017年)等が挙げられる。

美術館での従来の展覧会形式に時間や飲食の要素を持ち込むことはそれなりに目新しいことだったかもしれないが、いったん地域に出てしまえば、今も昔も表現活動に時間の流れや飲食が伴うことなど何ら珍しいことではない。

飲食活動がそれだけの理由では珍しくも何ともない場において、それはいかに「芸術」たりうるか、あるいは「大学」たりうるか。表現者や大学が提供する飲食の場は一般的な喫茶店におけるそれと何が違うのか、茶室での一服は茶店での一服と何が違うのか。私はその違いの一つを「省察」の有無に求めたい。現象の現れとしては然して違いがなくとも、そこに省察が加わることで一般のそれとは似て非なるものになる、という構えを私は取りたい。その場の全員ではなくとも、少なくとも飲食を仕掛ける側の人間が、その活動が省察の対象となることを予め前提としているかどうか。

そこには「文脈」への注意深さも求められるだろう。その場の空間的・歴史的・文化的背景における自らの立ち位置、学問や表現の歴史における自らの立ち位置など、どのようなコンテキストにおいてその現象を立ちあげようとしているかを俯瞰せんとする自覚。

交流、市民参加、地域活性の掛け声に身を投じつつも、この省察のプロセスが省かれるならば、芸術や大学の名を掲げながらそこに関わることはあまり無いだろう。現場の空気から一歩引いた眼差しを保ちつつ、折に触れそこへ省察の「しおり」を差し挟んでいくこと。それが大学の役割であり、芸術の役割ではないかと思う。

それでは「省察」が当たり前である場において、それはいかに優れた芸術たりうるか、あるいは実りある学問たりうるか。これについては一服してからまた考えることにしよう。いったんティーブレイク。

※1) 1996～2007年。

※2) 「リビング・ミュージアム」との理念は1974年開館時の谷口鉄雄館長によるもの。

※3) 振り返って考えるに北九州市立美術館が開館時に国内で初めて導入した美術ボランティア制度によってリビング・ミュージアムなる理念は見事に体现されていた。

# SMAART 資料編



事務局スタッフ2人に江戸時代からやってきた売茶翁がインタビュー！



今年度のSMAARTはどうだった？印象に残ったこと、面白かったことなんでも気づきを述べよ！

文化や芸術(アート)って美術館や博物館などの特別な施設で見るものってイメージでした。この仕事に出会って、打ち合わせや視察で色々な所へ足を運んだけど、出会った人たちはそれぞれに地域の文化芸術(アート)を盛り上げることに一生懸命取り組まれている、身近なところにもアートがいっぱい！ってことに気づかされました。



スタッフO

熱意のある受講生が多くて驚きました！今回このような仕事をして、改めてほんとにたくさんの方がいるんだな、と、当たり前のことですが、強く印象に残っています。人と出会うのが楽しくなっていました。



スタッフY



SMAARTがあることによって、佐賀にどのようなプラスがあると思うかのお。

佐賀県には「知る人ぞ知る」的な場所が多い印象だけど、そこで出会う「知る人」に魅力的な人が多くて、SNSなんか普及してもやっぱり繋いでいくのは「人」なのかなと思います。だから、地域の伝統・文化・芸術＝地域財産を「つなぐ人」＝「マネジメント人材」を育成するSMAARTの事業は魅力的だし、佐賀にとってもプラスだと思います。面白味のない事に人は目を向けないので、マネジメントができる人が増えれば埋もれている面白いことにたくさんの人を巻き込める気がします。それが地域文化を盛り上げ広げていくってことなのかな、と。



スタッフO

花田先生が何時かの講座で言われていた、佐賀は抽象的なアートより具象的なアートが強いという話を聞いて思いましたが、佐賀で、抽象的なアート活動(抽象画だけでなく、現代アートやインスタレーションなども含む)の受け皿をつくるためにもSMAARTは必要なんじゃないかとおもいます。

佐賀という「何もない」と言われる土地にこそ(本当はいろいろあるんです!)、いろんな視点や切り口がうまく入ることによって、もっといろんな魅力が引き出されるのではないかと。そのための人材を育成するSMAART!!



スタッフY



売茶翁

来年度に向けて思うことを述べてくれ。

今年度は「知る」ことをテーマにした講座が主だったので、事が大きく動いたような感じを持った人は少ないかもしれませんね。けど、来年度は少しずつ動きが出てくる予感。

私自身も運営メンバーの一人としてSMAARTと受講生とをつなげるお手伝い(マネジメント)していきたいと思っています。



スタッフO

人それぞれにいままでの経験の積み重ねがあって、たくさんの知恵をもっていて、それがつなげておもしろいものができてる、そのような流れをつくれるのもアートマネジメントの力のひとつでないかと思っています。来年度はその部分も受講生とともに強くみえてくればいいな〜と。



スタッフY

## 講師プロフィール



**Nadegata Instant Party**  
美術ユニット  
中崎透+山城大督+野田哲子

2006年活動開始。地域にコミットし、多くの参加者を巻き込みながら、映像ドキュメントやインスタレーション等を展開。近年の主な参加展に「MOTアニュアル2012 風が吹けば橋屋が倒れる」(東京都現代美術館)、「あいちトリエンナーレ2013」(中部電力 本町開閉所跡地)、「大分トリエンナーレ」(2015年・大分市内まちなか)等。



**森 司**  
アーツカウンシル東京  
事業推進室  
事業調整課長

1960年愛知県生。公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長。「東京アートポイント計画」の立ち上げから関わり、ディレクターとしてNPO等と協働したアートプロジェクトの企画運営や、人材育成・研究開発事業「Tokyo Art Research Lab」を手がける。



**若林 朋子**  
プロジェクト・コーディネーター /  
立教大学大学院21世紀  
社会デザイン研究科 特任准教授

1999~2013年(公社)企業メセナ協議会勤務。企業が行う文化活動の推進と芸術支援の環境整備に従事。在職中ネットTAMの企画・運営に携わる。現在フリーランスで、アート以外も含む各種事業のコーディネート、編集・執筆、調査研究、コンサル、評価、NPO支援等に取り組む。



**倉成 英俊**  
株式会社電通  
電通総研Bチーム

1975年佐賀県生。小学校の時の将来の夢は「発明家」。自称21世紀のプラブラ社員。電通クリエイティブ局に入社以降、数々の広告を作った後、広告のスキルを拡大応用し、気の合う人々と新しい何かを生むことをミッションに、公/私/大/小/官/民間関係なく活動中。



**的野 寛**  
一般社団法人長崎国際観光  
コンベンション協会  
国内誘致部さくら推進マネージャー

1969年長崎県生。大阪教育大学教育学部卒業。2002年より長崎国際観光コンベンション協会に勤務。コンベンション(学会、大会、スポーツ大会等)、プロ野球(ミニキャンプ、公式戦、オープン戦等)の誘致・支援等を経て、現在は長崎のまち歩き観光「長崎さくら」のマネジメントを担当しており、まち歩きの企画、運営方法の改善、ガイド育成等の業務にも携わっている。



**藤生 雄一郎**  
佐賀新聞社 生活文化部

1969年唐津市生。唐津東高、広島大学生物生産学卒業。同大学院生物園芸学専攻中退。奈良新聞社を経て、佐賀新聞社に勤務。情報デスク、唐津市助、佐賀市助を担当。生活文化部記者として長年、県内の芸術文化の取材に携わる。



**石丸 幹二**  
佐賀大学  
農学部教授

1959年愛媛県生。佐賀県小城市在住。九州大学大学院薬学専攻修士(薬学博士)。植物バイオテクノロジーによる二次代謝成分の生産と化学的研究に従事。薬用や園芸植物、また最近では、茶やネギ類の成分解析を行っている。



**菊池 一夫**  
明治大学  
商学部教授

東京都在住。2001年から愛媛県松山市にある松山大学経営学部に着任。商店街や街づくりの調査研究を行ってきた。2009年から東京の明治大学商学部に専任し、商店街の姿をこれまでは別の角度からとらえて活性化のヒントとして考えている。



**佐々木 保幸**  
関西大学  
経済学部教授

1965年京都府宇治市生。現在、関西大学経済学部教授、大阪府枚方市在住。主に大型店出店政策や商店街振興政策を中心に、日本とフランスの流通について研究を進めている。フランスでの在外研究では、小売業者や職人を大切にしている政策や風土を学ぶ一方で、豊富な食文化についても経験できた。



**田原 新司郎**  
Tokyo Art Beat  
NPO法人GADAGO

1983年北海道函館市生。「Tokyo Art Beat」PR・セールス、ソーシャルメディア、ニュースの編集を担当。都内を中心に自転車でもアートスペース巡りや日誌、アートPRのプロフェッショナルとして、ラグジュアリーブランドのアートスペースのPRも手がける。



**吉村 真也**  
公益社団法人企業メセナ協議会  
調査研究部会長 /  
TOA株式会社経営企画本部  
広報室室長

業務用音響・映像機器メーカーであるTOA(神戸市)にて、1997年より広報業務とメセナ活動の企画運営を兼務。2012年より調査研究部会長を兼務。地域の子ども達と音楽との出会いを創出する活動として「第6回パートナーシップ賞(2008年)」「メセナアワード2010文化庁長官賞」受賞。日本アートマネジメント学会等会員。



**花田 伸一**  
キュレーター /  
佐賀大学芸術地域  
デザイン学部准教授

1972年福岡市生。北九州市立美術館、フリーを経て2016年より現職。主な企画「6th北九州ビエンナーレ〜ことのはじまり」『千草ホテル中庭PROJECT』『ながさきアートの苗プロジェクト2010 in 伊王島』『ちくごアートファーム計画』。企画協力「第5回福岡アジア美術トリエンナーレ2014」「釜山ビエンナーレ2014特別展」他。



**牛島 清豪**  
株式会社ローカルメディアラボ  
代表取締役

1969年鳥栖市生。佐賀市在住。熊本大学文学部地域科学科卒(日本民俗学専攻)。1994年佐賀新聞社入社。営業、経営企画等の部署を経て、デジタルメディア部門で活動。新聞社初となったSNS導入や消費者参加型広告等を企画。2010年佐賀市でローカルメディアラボを起業。次世代地域メディアのブランニング、地域情報化の分野で活動している。



**村岡 安廣**  
株式会社村岡純本舗  
代表取締役社長

1948年生。佐賀県立佐賀西高等学校、慶應義塾大学商学部卒業。佐賀県企業メセナ協議会代表世話人として地域の文化活動に積極的に関わり、全国銘産菓子工業協同組合理事、小城市農協同組合理事など。著書に「村岡安吉伝」「江戸時代人づくり風土記「佐賀」」「肥前の菓子」。



**八百 啓介**  
北九州市立大学  
文学部教授

1958年福岡県北九州市生。1989年九州大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。オランダ東インド会社の研究から始まって、やがて出島オランダ商館の主要輸入品であった砂糖の数量・価格の解明に取り組むとともに北九州の菓子文化を研究。最近では中国、韓国と共通する東アジアの食文化に関心を持つ。



**杉本 達應**  
佐賀大学  
芸術地域デザイン学部  
准教授

1975年熊本県生。佐賀市在住。佐賀大学教育学部卒業。岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー卒業。東京大学大学院学際情報科学府博士課程単位取得退学。デジタルコンテンツデザイン、メディアアート、ワークショップデザイン、メディア研究などの複数領域で活動中。



**野田 恒雄**  
建築家 /  
TRAVELERS PROJECT 主宰

1981年京都生。東京立大学(現首都大学東京)卒。青木茂建築工房を経て、2005年に福岡でTRAVELERSPROJECT開始。冷泉荘や樹屋2023で、アーバンデザイン賞、福岡市都市景観賞等。共著に「アートプロジェクト 芸術と共創する社会」(熊倉純子監修水曜社)等。2014年より横浜市都市デザイン専門職兼職。



**鷹野 隆大**  
写真家  
東京造形大学特任教授

1963年生。2006年にセクシュアリティをテーマにした写真集「IN MY ROOM」(蒼舎舎)で第31回木村伊兵衛写真賞を受賞。2011年には日本特有の街並みを集めた写真集「カスババ」(発行:アトイット)を発表。性や都市を主題に、制度化された視覚や社会の枠組みを問う作品を発表している。近作の写真集「光の欠落が地面に届くとき距離が奪われ距離が生まれる」(edition nord)など。



**川本 喜美子**  
NPO法人  
高遊外売茶翁  
顕彰会理事長

1946年生。地域情報プロデューサー。生活情報誌副編集、NHK佐賀放送局「キミの部屋」MC等を務める。煎茶の祖と言われる佐賀出身の禅僧「売茶翁」を広く発信すべく2004年にNPO法人高遊外売茶翁顕彰会を発足。2010年にその情報発信拠点として開設した「前通仙亭」の企画運営に携わる。



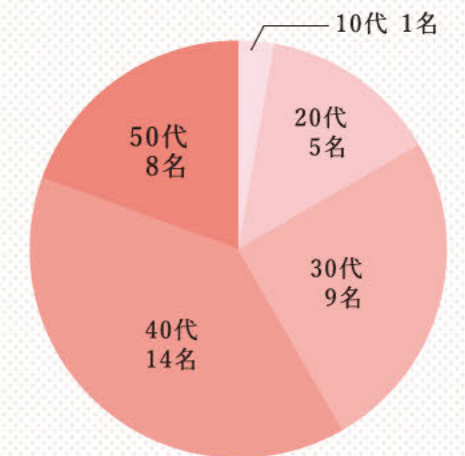
**売茶翁**  
(1675~1763)

佐賀蓮池支藩に生まれる。選層を過ぎて京都鴨川付近に「通仙亭」を営み茶を売って生計を立てる。路上で「釋」の教えを説きながら煎茶をふるまう。深い精神で、庶民だけではなく伊藤若冲や池大雅等の一流文化人をも魅了した。売茶翁の肖像画は伊藤若冲(1716~1800)が「売茶翁傳」の表紙絵として描いたものである。

## 受講者の構成

Aコース	11名	
Bコース	6名	
A+Bコース	20名	計37名

## 年齢

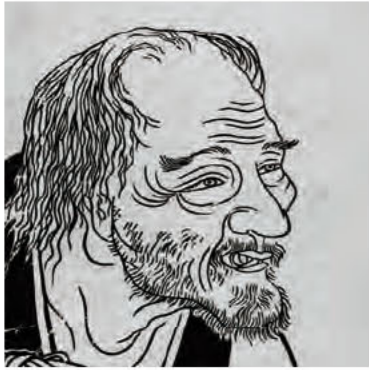


## 職業

会社員	12名	教員	1名
公務員	7名	飲食業	1名
自営業	4名	農家	1名
無職	2名	学生	1名
パート	1名	団体職員	1名
県庁非常勤	1名	事務スタッフ	1名
小学校スクールアシスタント・学童支援員	1名		
イラストレーター	1名		
キャリアカウンセラー	1名		
食のまちづくりアドバイザー	1名		

## 地域





### 売茶翁

売茶翁(1675-1763)。佐賀市蓮池町生。本名は柴山元昭、幼名は菊泉。法名は月海で、還俗後は高遊外とも称した。黄檗宗の禅僧として各地を巡り、長崎で煎茶を学び60歳を過ぎてから売茶の業を始める。京都鴨川のほとりに"日本初の喫茶店"ともいわれる「通仙亭」という茶店を構えた。自ら茶道具を担ぎ、四季を感じられる清明な自然の中で茶を煎じ売ることもしばしば。身分を問わず、茶代を払おうと払うまいと気にかげず、禅を説きながら、世の中の出来事などを物語ってきかせ、たちまち人々の評判になった。

本事業では地域に精神的刺激をもたらす第三者としてアーティストと売茶翁を重ね合わせ、喫茶・食文化から生まれる交流の場に着目しながらアートプロジェクトおよびマネジメント人材育成に取り組む。



### 肥前窯業圏

16世紀末の有田に始まる日本磁器の歴史を伝える九州北西部の窯業地(佐賀県5ヵ所、長崎県3ヵ所)。平成28年「日本磁器のふるさと 肥前」として文化庁より日本遺産の認定を受けた。

陶石、燃料(山)、水(川)など窯業を営む条件が揃う自然豊かな九州北西部の地「肥前」で、陶器生産の技を活かし誕生した日本磁器。その製品は全国に流通し、我が国の暮らしの中に磁器を浸透させるとともに、海外からも賞賛された。

今でもその技術を受け継ぎ特色あるやきものが生み出される「肥前」。窯元の煙突やトンパイ塀は脈々と続く窯業の営みを物語る。この地は、歴史と伝統が培った技と美、景観を五感で感じることでできる磁器のふるさとである。



### 嬉野茶

佐賀県唯一のお茶どころ。日本茶では珍しい独特の丸みを帯びた茶の形状から玉緑茶(グリ茶)とも呼ばれ、香りも強い特徴的な茶。

1440年、平戸に渡ってきた明の陶工が茶栽培の適地を探し求め不動山皿屋谷(嬉野町)に移住したことに端を発し、その後1504年に陶工・紅令民が明から釜を持ち込み南京釜による炒製茶法を伝えたことが、嬉野茶の特色「釜炒り茶」発祥に結びついた。

茶葉の育成に適した環境と釜炒り技術により産地は拡大し、幕末には長崎から輸出され欧米に評判が広がった。長崎・横浜・箱館開港(1859年)に先立つ1853年、大浦慶によってオランダ人商人テキストルに嬉野茶のサンプルが供され、1856年8月にイギリスの商人、W・J・オールドから巨額の注文を受けたのが、幕末期の本格的な茶輸出の始まりとなった。



### シュガーロード

江戸時代、鎖国のもと海外との唯一の窓口であった出島に荷揚げされた砂糖は、長崎から佐賀を経て小倉へと続く長崎街道を通り、京・大阪・江戸へと運ばれた。和菓子とは違い砂糖をふんだんに使う南蛮菓子の伝来により菓子の世界に革命が起こり、長崎街道を中心に砂糖文化が各地の文化と風土と融合し、個性ある味へと花開く。

街道沿道は砂糖のほか、菓子作りの技法なども入手しやすかったため、全国的にも著名な銘菓が生まれた。そのため長崎街道は砂糖の道「シュガーロード」とも呼ばれており、今なおその技術と味は受け継がれている。

### アートカフェ

美術用語として「アートカフェ」という正式な語があるわけではありませんが、ここでSMAARTが思い描くアートカフェとは、表現者たちを引き付ける磁力をもったマスターが中心にいて、その磁力に引き寄せられたアーティストやアートファン達のたまり場となっているというイメージです。あるいは展示スペースに飲食スペースが併設されており、展覧会鑑賞後、飲食しながら芸術談議ができる環境があるなど。その場では、展覧会、コンサート、映画上映会、トーク、勉強会などの文化的なイベントが不定期に行われます。

いずれにせよそこには文化芸術にウンチクの深いマスターの存在が重要です。

### なぜ佐賀でアートカフェなのか

地域の文化芸術振興を考える場合、美術館やギャラリーや美術大学などの存在はもちろん大きいものですが、その他にも民間によって支えられている大小の活動が欠かれません。なかでも特にカフェの場は身近に足を運びやすく、飲食をともにすることで堅苦しくなくリラックスしながら文化芸術に触れ、刺激を高めあえる環境があります。そのようなたまり場が街にあることで、街のアーティストやアートファンが育っていきます。カフェはいわば一般に門戸の開かれた街の小さなアカデミーといえるでしょう。

佐賀にはやきもの文化・茶文化・菓子文化がすでに豊かにあり、それらの地域資源を活用しながらアートプロジェクトを行うとすれば上述のようなアートカフェのスタイルを取るのが自然であると考えます。

SMAARTでは、2017年度、2018年度と入門編・応用編と講座を進め、その成果をふまえた実践編として、2019年度に県内各所に臨時アートカフェを巡回させます。動くカフェ、動くアカデミー、それがモバイル・アカデミー・オブ・アートです。

先述の通りアートカフェにおいてはマスターの存在が重要です。佐賀ゆかりの江戸期の禅僧、売茶翁をお手本に、現代アーティストを佐賀に招聘し、現代の売茶翁にあたるマスターとしてカフェに配置します。売茶翁が禅寺から地域に出でお茶を通じて禅の教えを広めたように、SMAART実践編では大学や美術館から地域に出でお茶を通じてアートの価値観を広めます。臨時アートカフェを拠点として招聘アーティストのアイデアを基にしながら各地で種々の文化芸術イベントに取り組みます。

2017年8月18日 配布資料(花田伸一作成)より

広報資料



受講生募集チラシ  
デザイン：北島敬明 (PERHAPS)



1/20 アートカフェ実践編「街歩き写真ワークショップ」告知チラシ  
デザイン：北島敬明 (PERHAPS)



SMAART 公式Webサイト  
デザイン：株式会社ローカルメディアラボ  
<https://sma.art.saga-u.ac.jp>

SNS  
facebook : SMART.sagau  
twitter : @smaart\_sagau



文化庁で開催される「中間報告会」の展示ブースに設置したポスター  
デザイン：古川渚 (リコリス)

メディア掲載



平成29年6月27日 佐賀新聞



平成30年2月7日 佐賀新聞



平成29年6月27日～7月4日放送 有田ケーブルテレビ

# 表紙のはなし



## 売茶翁 (1675～1763)

佐賀市蓮池町生。本名は樂山元昭、幼名は菊泉。法名は月海で、還俗後は高遊外とも称した。黄檗宗の禪僧として各地を巡り、長崎で煎茶を学び60歳を過ぎてから売茶の業を始める。京都鴨川のほとりに「日本初の喫茶店」ともいわれる「通仙亭」という茶店を構えた。自ら茶道具を担ぎ、四季を感じられる清らかな自然の中で茶を煎じ売ることもしばしば。身分を問わず、茶代を払おうと払うまいと気にかげず、禅を説きながら、世の中の出来事などを物語ってきかせ、たちまち人々の評判になった。

売茶翁の肖像画は伊藤若冲(1716～1800)が『売茶翁偶話』の表紙絵として描いたものである。

## 平成29年度 文化庁 大学を活用した文化芸術推進事業

「芸術を通じた地域創生人材の育成～肥前窯業圏のやきものと茶文化をめぐる

アートカフェとネットワークづくり」

佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート(SMAART)

主催：佐賀大学芸術地域デザイン学部

協力：佐賀県 / 佐賀県立窯業技術センター / 佐賀県九州陶磁文化館 / 佐賀県立美術館 /

公益財団法人 佐賀市文化振興財団 / 佐賀大学肥前セラミック研究センター / 佐賀

大学茶の文化と科学研究所 / 佐賀大学美術館 / 文化経済学会(日本)九州部会

後援：佐賀新聞社 / サガテレビ

## SMAART事務局 平成29年度企画運営スタッフ

小坂 智子 (芸術地域デザイン学部 教授)

花田 伸一 (芸術地域デザイン学部 准教授)

西島 博樹 (芸術地域デザイン学部 教授)

杉本 達應 (芸術地域デザイン学部 准教授)

緒方 和子 (企画アシスタントスタッフ)

吉村 美歩 (企画アシスタントスタッフ)

伊藤 美千子 (経理担当)

池田 尚美 (経理担当)

芸術地域デザイン学部総務

## 佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート 2017 記録集

発行日 2018年3月9日

編集 佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート事務局(花田 伸一、緒方 和子、吉村 美歩)

写真 藤本 幸一郎・荒巻 万里子(H29.10/15 講座担当)・SMAART受講生(H30.1/20 講座担当)

デザイン 北島 敬明(PERHAPS)

発行 佐賀大学 芸術地域デザイン学部

佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート

〒840-8502 佐賀市本庄町1番地

TEL : 0952-28-8309

URL <https://sma.art.saga-u.ac.jp/>